2024年3月4日（月曜日）
相良村体育館第2・3研修室

熊本県知事　蒲島郁夫　様

熊本県球磨郡山江村
松本佳久

「川辺川の流水型ダムに関する環境影響評価準備レポート」に係る公述書

山江村大字万江の松本佳久です。
川辺川の流水型ダムに関する環境影響評価準備レポートに係る公述をします。
流水型川辺川ダムは、五木村にも相良村にも、そして清流川辺川にも球磨川にも不知火海にも、流域全体の動植物やそこに暮らす人たちの生活環境にも少なからず悪影響を与え、又そこに暮らす人々の生命を守るための効果も良く見えないので、私はその建設に反対します。

川辺川の環境影響評価準備レポートは、5,000ページにも及ぶ分厚いレポートです。閲覧会場の中で一番近い山江村役場へ行った私は、ずらりと並んだ資料を見て、早々と全体を読む閲覧をあきらめました。
幸いにも2023年12月20日に山江村で、21日には人吉市での説明会に参加することができ、そこで配布された「環境影響評価準備レポートのあらまし」や国交省の説明、会場からの質問に対する国交省の回答などを参考に反対の理由を延べます。

準備レポートあらましの中の、特に8ページからの「04調査、予測の結果及び環境保全措置」の中で、17ページからの（4-5）生態系、22ページ（4-6）動物、23ページ（4-7）植物、24ページ（4-8）景観、25ページ（4-9）人と自然との活動の触れ合いの場、26ページ（4-10）廃棄物等、「26ページ05事後調査」、及び「26ページ06総合評価」について公述をします。

これらのうち、4-5から4-7については、準備レポートの中で国交省も「悪影響がある」と報告されており、その対策も記載したうえで、人吉市会場での参加者からの質問に対して「問題があれば専門委員会で調査して解決策を探る」と、事業者側の希望的な答弁をされています。

どうして蒲島郁夫熊本県知事と国交省は、環境に対して悪影響があると分かっているダム建設事業を押し進められるのか、私には理解できません。
クマタカもツヅラセメクラチビゴミムシも、その他の種も、地球にとって貴重な尊い、かけがえのない大切な動植物類・昆虫類です。
私たち人類は決して地球の頂点に立つ自然界のリーダーではなく、大自然の一部を占める一つの種です。謙虚に質素に自然と調和しながら、出来るだけ環境に負荷をかけないような生活スタイルを追求しなければなりません。自然を守れば自然が私達を助けてくれますが、自然を壊せば自然からのしっぺ返しを受けるのは私達人間であり、そこに暮らす私たち地域住民です。

2008 年 3 月に初当選された蒲島知事は半年後の 9 月、「球磨川そのものが守るべき県民の宝である」として「川辺川ダム建設・白紙撤回」を高らかに表明されました。多くの県民は、長い間県民を分断してきた川辺川ダム建設問題について蒲島知事が英名なる決断を下されたと、盛大な拍手を送りました。私もその一人でした。
ところが同じ蒲島知事が 12 年後の 2020 年 7 月 4 日の球磨川流域豪雨災害を見た後では、同年 11 月に流水型川辺川ダムの建設を国交省に要請すると表明されたのです。
同時に「流水型川辺川ダムの建設を含めた緑の流域治水」を推進すると発表されました。緑の流域治水は保水力を高める山林の手入れの大切さなど、ほとんどの点で理解できますが、①流水型川辺川ダムの建設は環境に悪影響を与える、ダムが想定外の豪雨災害に対応できるのか疑問、②遊水地計画に反対される農家の田んぼを遊水地にする計画は農家と地域を疲弊させる、③緑の流域治水には住民の声を反映させる“緑の流域住民治水”の視点がない、以上の 3 点にはどうしても賛意を示すことはできません。

人命を守るためにはダムの建設よりも、安全な場所への早期避難です。それしか方法はありません。山江村では 2020 年 7 月 4 日の豪雨災害で幸いにも人的被害がゼロでした。これは日ごろからの地域づくり政策と地域住民の助けあい精神が確立していたために、発災当時も住民が声掛け合って安全な場所へ早期避難したことが人的被害ゼロを生み出したのです。繰り返しになりますが、人命を守るためには安全な場所への早期避難しかないのです。

2021 年 11 月 20 日発行の「流域治水がひらく川と人との関係」（編集者・嘉田由紀子、出版社・農文協）によれば、残念ながら今回の豪雨災害で亡くなられた方の多くは球磨川や川辺川の氾濫によってではなく、支流の山江村の

山田川や万江川、球磨村の小川川や川内川など球磨川の支流からの出水や、お溝川への万江川からの越流が下流へと流れ込み被害をもたらし、亡くなられていることが分かります。亡くなられた方がどのようにして犠牲となられたかを検証することは、今後の治水対策にも有効となるはずで、水害の検証についても早急な実施をお願いするところです。

かけがえのない川辺川など美しい大自然の環境を守るためには、たとえ流水型であれ川辺川ダムを建設すべきでないことは明白です。2 月 27 日、2 期目の村長選挙の当選を無投票で決められた相良村長・吉松啓一様も「日本一の清流・川辺川を子々孫々まで残す」と、すべての村民の願いを当選の弁の中で述べられています。
蒲島知事は緑の流域治水で生命と環境の両方を守るといわれますが、命を守るには安全な場所への「早期避難」しかありません。環境を守るには緑の流域治水に流域のことをよく知っている住民を加えた「緑の流域住民治水」による計画策定しか方法はありません。すでに近畿の淀川水系では住民による流域住民治水が始まっています。

人々はこの地域で、自然とともに数千年・数万年も生きてきました。時々の洪水を甘受しながら、川とともに、自然とともに暮らしを続けてきたのです。流水型の川辺川ダム建設を取りやめて、豊かな環境を後世に残すことこそ、今を生きる私たちに課せられた使命であり、遠い将来、そのことで子孫からGood ancestor、良い祖先と尊敬の念を持って呼ばれることとなるでしょう。

蒲島知事の賢明なるご判断を切に要望して、以上で私の公述を終わります。